心人物となつてゐることなどが擧げられる。若しこのやうに考へるならば、論語の諸篇は孔門諸派の主張の相違を豫め知つてゐなければ理解できないものといふことになるであらう。武内博士は『支那思想史』などに於いても既に孔門の諸弟子の間に曾子學派や子游學派などといふやうな學派の別があつたことを主張して居られるが、このことは必ずしも無條件に承認せられることとは言へないやうに思はれる。孟子や禮記に曾子と子游・子夏の爭ひがあつたことを暗示するやうな個所はないとは言へないが、然しこの程度の不和ならば單に個人間の感情の行き違ひからも生じ得べきこととと考へられるのであつて、このことを以つて直ちに『學派』の對立と見なすことは困難なことではなからうか。なるほど均しく儒家と言つても、孔子と孟子と荀子では三者ともに主張を異にしてゐるが、これは當然さやうになるべき歴史的な事情が背後にあつたからである。然るに孔子の弟子の間に既に主張を異にしたものがあつたといふことは如何なる理由によるのであらうかまたたとへ諸弟子の間に幾分の意見の相違があつたと假定してもその後に學派として生長して行くだけの十分な理由と基礎があつたかどうか。

單に曾子の言行を多く載せてゐるといふ事實から、其の篇が曾子學派の人々によつて傳へられたといふ結論を導き出すのも、やや機械的に過ぎた論理のやうに思はれる。それらは總べて曾子學派といふやうなものの存在を豫想して始めて言へることであつてこれを疑ふものにとつては重大なる意味をもつものとは考へられない。要するに武内博士の『論語之研究』は其の著しい特色のあるところに問題もあると言へるのではなからうか。

淺人妄語の罪を深く御詫び申上げる。（菊版本文三六二頁、圖版一三葉、岩波書店發行、定價參圓五拾錢）〔森三樹三郎〕

「日本思想史」中世國民の精神生活

清原貞雄著

日本思想史の冠冕のもとに、上代より奈良朝を經て平安朝へと我が國民の精神生活の叙述を進められた清原貞雄博士は、今回その中世編を上梓せられた。卷を開くに先立ちて、その研究企畫のいかにも壯大なるに一驚し、その學的意欲のまた旺盛なるに三歎せざるを得ないのである。誠に博士が生涯を賭しての大業と言ふてよく、私はこの偉業の完成一日も早からん事を先づ祈るものである。

本書の内容は全篇を前後二篇に分ち、前編を鎌倉時代後編を室町時代に宛てられてをり各篇の最初に序論を附して時代の概觀を加へられてゐるあたり、兩編はもと〳〵夫々が一卷をなすべきものであつたのを便宜合卷せられて本書を編まれたものと思はれる併し卒直に言つて「中世」なる言葉を鎌倉・室町兩時代の同義語の如く取扱はれる態度には少しく不滿な點がある。言ふまでもなく中世とは古代と近世と共に歴史を三時代に區分する純粹に文化史的な區分法であり、中世なる言葉からは古代的なるものより近代的なるものへの過渡の時代としての意義を深く感得するのであつ

て偶々日本の中世が政權推移による時代區分である鎌倉室町の兩時代に當るとしても、それは所詮ほゞ相當するといふに止まり、中世の限界を更に上下せしめることはなほ學者にとつて見解の自由性の存するところであるまいか。まして此一聯の書物に於て二つの時代區分法を混同して使用されたことは確かに不用意であつたと思ふ。

さて前編鎌倉時代に於ては最初に「宋學の輸入と其影響」について宋學の特色より說き起して詳細に論述せられ、次に「神道」については神祇に對する實際信仰の狀態より伊勢神道の勃興に至り、更に佛敎神道にも言及せられてゐる。「佛敎」に就ても禪宗の輸入眞宗の開立と親鸞の敎說、日蓮宗の開宗と日蓮の思想等を詳論せられ、次いで「道德思想」を文獻的に考究せられて「武士道の發達」に論を進められる。神國思想及國體的自覺の發達など所謂當代の「國家意識の發達」を語られるあたり精細を極めてをり、最後に武家政治の指導精神と政治論を說かれた「政治思想」の章を結びとして、前編七章を終るのである。後編室町時代に於ては、この中に吉野朝時代を含められるものの如く、最初に「社會相の鳥瞰」をなし、次いで「國體思想と國體論」を詳述せられ、更に「對外的に現はれた國家我の自覺」と題して對明外交についての通說の反面が說明されてゐる。次に「神道說の發達」については流石に詳密で慈遍・親房・忌部正通の神道說、佛敎神道の發達、一條兼良の神道說、吉田神道などが要領よく論ぜられ、更に「佛敎」及「政治思想」にも說き及ぼされ、最後に「勤皇思想の勃興」の章をもつて、後篇七章を結んでゐられる。以上は單なる內容の概觀であるが、說き去り說き來り、論旨は極めて穩當であり、論辯はまた平易であつて私など初學者には誠に好き思想史の概說書であると思ふ。

思想史の研究はその方法から云つて、概時代の個人の觀念を表明する文獻を可及的に多く集積し、かくてその中に時代思想の潮流を規定せんとする方法が極めて有力な一方法であり、博士も亦之に從ひ遍く文獻を涉獵して遺憾なきを期してゐられるのであるが、併しそれはそれらの個人が文化荷擔者である限り思想史としては一應承認せられようが、果して言はゞ如く國民の精神生活を說明し得るものであらうか。今も昔も自己の思考を公然と發表し得るものは百萬人に一人あるかなきかの心細さである事を思へば、その一人の言說より國民全般の精神生活を究めんとするは大いに危險と言はざるを得ない。そこに研究の困難は嚴然として橫はるのであるが、我々のこの方面の研究方向はむしろ題目のうちの「生活」といふ部分に集中せらるべきではないかと考へる。すなはち生業・風俗・娛樂・信仰・祭祀・行事等の生活そのものに關聯する部分にも透徹せる史眼を開くならば、案外に目的の實相に近きものを抽出し得るのではなからうか。かくて把握されたものは思想とは言ひ得ないにしても、國民の一般に切實なるものであるから、本書の本題にはふさはしきものゝ言へるであらう。

とまれ本書を通讀して私は博士の學識の深大なるに驚歎し、又論述の懇切なるに感激せることを告白し、博士が日本思想史の研究に精進せらるる雄姿に深甚なる敬意を表したいと思ふのであ

る。（菊版本三八五頁、索引一一頁、中文館書店發行、定價金三圓五十錢）〔林屋辰三郎〕

近世日本の儒學

德川公繼宗記念祝賀會 編

斯文會は、明治初期より大正・昭和を通じて儒教精神の再認識を行ふことに於て、止まる所を知らない活動的な西洋文化の許容に對しては、一つの東洋的な反省と制御の役割を果して來たのは人の認むる所であらう。本書はその斯文會に偉功ある會長德川家達公の繼宗七十年を、最も意義深い方法に於て慶祝記念した論文集で、主として斯文會員の手に成るものである。本書編纂の目的意義は「公の祖宗の功績を顯彰する所以なると共に、又實に現代日本の礎地を明確にする所以」（同副會長坂谷芳郎男「序」）である。からである。啻に德川公を祝賀するにふさはしい記念出版物たるに止らず、現今しきりに東亞の諸問題が原理的に問はれつゝある時に當つて、一つの大いなる收獲を加へたものと云はなければなるまい。

本書に就いては既に肥後和男氏の優れた紹介・批判があるが（『社會經濟史學』第九卷第九號）煩をいとはず、少しく氣づいた點を捕足しつゝ概要の紹介を試るであらう。

×

四十八篇の論文は四部に分類されてゐる。題目と執筆者の芳名を掲げるならば（敬稱略）

總說（「總論」井上哲次郎）……（假りに第一部とする）

德川幕府と儒學（「家康と儒學」山口察常、「綱吉と儒學」加藤虎之亮、「吉宗と儒學」平野彦次郎、「林家と文教」中山久四郎、「水戸學（初期）」德川慶光、「水戸學（後期）」藤澤誠、「松平定信を中心とする諸侯の教養」松平定光、「寛政異學の禁」諸橋轍次、「幕末の儒學」芳野幹一、「聖堂と昌平坂學問所」近藤正治、「紅葉山文庫の沿革」濱野知三郎、「諸藩の文教一般」大江文城）……（第二部）

諸家の學風・特色（「藤原惺窩の學的態度」太田兵三郎、「林羅山と本朝通鑑」平野彦次郎、「藤樹と蕃山」梁田甚五郎、「山崎闇齋と其の教育」阿部吉雄、「山鹿素行の一面」小柳司氣太、「木下順庵と新井白石」澤田總清、「伊藤仁齋の一考察」宇野哲人、「淺見絅齋の大義名分論」坂井喚三、「室鳩巢と朱子學」鈴木直治、「荻生徂徠に關する二三の考察」鹽谷溫、「三浦梅園の學風と南豐の儒學」高田眞治、「細井平洲の學德」高濱代次郎、「佐藤一齋の貌神」林竹次郎、「頼山陽の史筆」鹽谷溫）……（第三部）

江戸儒學の諸問題（「神道と儒學」飯島忠夫、「儒學と國文學との關係」久松潛一、「闇學と儒學との交渉及び幕府の對蘭學政策」板澤武雄、「折衷概括」佐藤文四郎、「考證學概說」中山久四郎、「薩摩の儒學」山田琢、「南學の特質」小林信明、「京儒の學」中山久四郎、「大阪の儒學」藤澤章次郎、「德川時代の漢文學」（其一文章）佐久節、同（其二詩）前川三郎、同（其三、支那語學・支那俗文學）齋藤謙一、「江戸時代儒者の書」高野辰之、「江戸時代の儒